

## 挨拶

梅原 猛

本日は、私も国際日本文化研究センターが主催します、国際研究会の冒頭の公開講演会においでいただきましてありがとうございます。国際研究会も、これで三年目になります。後からお話するうちに、このような形の研究会、及び基調講演は、今回で終わりでございます。そこで、今日は、ごあいさつがたがた、私どもの国際日本文化研究センターの紹介をさせていただきたいというふうに思います。

国際日本文化研究センターといいますが、まだ京都市民でござらない方が多いのではないかと思います。中には、日本文化センターというところと間違えられて、そこはテレホン販売の会社だそうでございますが、ときどき、おたくは何を売っていますかという電話があるわけでございます。どうも京都市民に知られていないから、少し宣伝したらどうだ、新聞広告も出したらどうだというような仰せを承るのでございますが、私はいささか謙虚な性格でございます。「桃李物いわずれども、下自ずから徑をなす」私は、桃や、すももは語らないけれども、自然に人が集まって来るというような形に、センターをするのがいちばんよいことだと思ひまして、宣伝らしい宣伝はいたしていいのであります。

しかし、簡単に申しますならば、これは国立の機関でございます。完成時における定員は、教員が三十名、職員が五十名で、まあ単科大

学くらいの規模でございます。現在のところ教員が二十五名まで充実されておまして、ときどきテレビや新聞で、当センターの肩書を持つ教授の名前が現れて、センターの名をご存じの方も多いと思います。こうして、桃李いわずれども、だんだん有名になって来るというのが私の理想でございます。

しかしながら、多少のご紹介をいたしますならば、これは国立であります。大学共同利用機関、全国の大学の学者たちが、共同利用する機関ということになっております。今のところ、現在全国でこのような機関は十四あるわけでございます。皆さんがご存じのところを紹介いたしましたならば、大阪の千里にございます、梅棹忠夫先生が館長をされております、国立民族学博物館。あるいは、千葉県の佐倉にあります国立歴史民族博物館。こういう博物館をともしう研究所が、この大学共同利用機関の一つの例です。

理科系ですと筑波にあります、高エネルギー物理学研究所。あるいは岡崎にあります岡崎国立共同研究機構。これは三つの研究機関からなっておりますが、そういったものがあります。これは、私は研究というものは大学で行う、大学の研究が研究の主体でございますけれど、大学で行う以外の研究、国立の研究所と大学が、車の双輪のように活動するのが、日本の研究の本来のあり方だと思ひます。そういう研究所が十四あります。その中の一つに属するわけでございます。

それでは、こういう共同利用機関でございますけれども、ここで一体何をやるのかといえますと、普通大学の教授といえますのは、研究と教育を行うというのが大学でございますけれども、私のところの教

授の義務は、共同研究の主権者になる、あるいは共同研究の幹事になる。その共同研究と研究協力をするというのが、私どもの教授の義務でございます。

もちろん、個人研究もしているわけでございます。個人研究をしなれば、とても学者ではないわけでございまして、それはあたり前のことですが、当センターでの教授、助教授の義務は、共同研究の主権者をする、あるいは共同研究の幹事たるということと、研究協力をするということでありまして。ここで共同研究とはなにかと申しますと、先ほど申しましたように、日本の大学の、いろんな大学から学者が集まりまして、そして、一定のテーマに基づいて共同研究をする。三年、あるいは四年の期間の間の共同研究をして、その成果を発表する。そういう共同研究の機関でございます。

しかも、この共同研究は、総合的でありまして国際的な性格を持っているわけでございます。この総合的というのは、些か申しましたならば、学会の趨勢は、段々総合的ではなくて、個別的、専門的に移っているんです。これが学問というものの性格でございますが、そういうふうな学問は、一方において専門化していく、個別化していくと、ますます精緻になっていくのは必然でございますが、しかし、一方において、総合の方向を目指すなくては、私は学問はだめになっていくと思えます。この二つの方向が同時に行われて、初めて生きた学問が出来るわけでございます。

この研究所は、大学の学問がだんだん個別化していく、専門化していく、精緻なものになっていく方向に対して、逆に総合化していく、

そういうことを目指すのでございます。そういう両方の方向があつて、一國の学問が健全なものになるというふうな思つております。とかく日本に関する学問は、各大学に講座があつて、非常に専門的な学問として優れた業績を生み出しています。しかし、総合化というところでどうしても弱い。総合化が弱いとなかなか創造的な学問が育たない。この創造的な学問ということについては、これだけ日本の学問が発展しながら、多少弱いのです。ノーベル賞の学者が、やはり少ない、ほとんど京都から出ているということもありますけれども、全体からみて、アメリカから比べればもちろんですけれども、西ドイツなどに比べても大変少ない。そういうやはり、学問の創造性というものを、日本の学問は十分發揮する必要があります。それには、学問の総合化ということが必要でございます。

この研究所は、総合的と共に国際的な共同研究の場所でございます。国際化ということでございますが、この国際化ということは、この共同研究のメンバーに外国の方も入っているということでもあります。私のところは、外国人の客員教授の定員を、完成時に十人いただく予定です。外国人を含めた日本人の専任者が、三十人、その三十人に対して客員教授の外国人が十人という機関は、日本の研究機関では大変少ないんです。

そういう形でございまして、必ず共同研究には外国人が入っているということであると同時に、この研究が、やはり国際的、普遍的な研究でない駄目だということでございます。

そういうことでございますから、たとえばいうと、有名な日本人論

としまして、ルースベネディクトの『菊と刀』という本があります。これは非常に優れた日本人論ですが、日本とヨーロッパを比較した、そういう日本人論でございます。ヨーロッパは罪だと、日本人は恥だと、罪と恥という概念で日本文化とヨーロッパ文化の比較をした優れた本でございます。今後の日本研究は、ヨーロッパとの比較だけではいけない、やはり、アジアとも比較しないとけない、中国、韓国、あるいは東南アジア、インド、そういういろいろな国との比較をしないとけないと私は思うのでございます。この研究所は徹底的に日本を比較と関係において研究する、関係というのは相互影響、それを明らかにしないと日本という国がよく分らないのです。

だから、私どもはあくまで普遍的、客観的な日本研究を目指しているわけでございます。私は、いま日本に必要なのは、客観的に日本を見ることだと思います。日本人は、尊大に陥ってはいけない、戦争中のように、ああいう日本主義は、二度と取るべき道ではない、今、そういう方向に行こうとしている人たちもありますけれども、私たちは反対でございます。やっぱり、それは、コンプレックスの裏返しのような気がいたしますが、過度の自信も危ない、あるいは過度の卑下に陥ってはならない。日本文化を客観的に見て、そして、われわれは世界に通用できる、日本をじっと見つめて、義務を考えつつ、自分に自信を持って行く、そういう態度にあるべきだと私は思うのでございます。

私は、直接に今の日本の政治に役立つような学問を、ここはすべきでないというふうに考えております。たとえば、現在の貿易摩擦から、

日本の流通構造が大変複雑ではないか、もっと簡素化出来るんじゃないかというふうな意見が、国際的に起こっています。こういうときに、日本の流通機構は、日本の特殊なもので、変えることはできない、これこそ日本的なものだという意見がありますけれども、私は個人的に、こういう意見に組まないものでございます。そういう複雑な、中間的な利益を得る人がたくさんいる機構が、果して日本のかどうか、日本の伝統に照らして、神道に照らしましたら、神道は大変シンプルなものです。余分なものは含まないというのが神道の美学でございまして、恐らくそういう余分なものは、神道的でない、大乘仏教の中心は、菩薩行でございまして、自理自他の精神からみても、それは決して日本ではないというふうに思うんです。

こういうのを全部日本的だとして、日本的なものとは変わらないという形の議論を提供することは、決して私は、本当の日本研究ではないというふうに思うのでございます。

そういうふうでありまして、私は、今こそ日本についての客観的な、しっかりした日本像を持つ必要があると思うのであります。このセンターの役割は、そういう共同研究を一つの右の輪とすると、左の輪は、研究協力なんです。これは、世界から日本学者がたくさん日本にお見えになっていただいているわけでございますが、日本人と外国人の共同研究の場所もない、あるいは外国人がきても、日本の研究の資料を、はつきりデータを集めているところもない。日本研究の情報をつくる、これが私のところの課題でございます。

そして、外国の方々の研究に協力をするというのが、うちのセンター

の教授の義務でございます。今、情報につきましては、濱口情報管理施設長を中心に、情報の施設をつくるように努力しております。そして、研究協力のほうでは、客員教授ばかりか、国際交流基金から、うちにたくさんの方々が来られてまして、いろいろわれわれと一緒に研究協力というより、われわれが教えられながら一緒に研究をしています。そして、皆さんご存じだと思いますが、交流基金のお部屋を借りまして、一月に一回、フォーラムというものをやる、そこでいろいろ情報交換をする、外国の方々も日本人の意見を聞かしてほしいという気持ちを持っているし、われわれも、そういう外国の方々の、本当に新しい視野をもった研究を知りたい。外国人によって日本研究の水準が上がります。日本人には想像することすら出来なかったような視野の学問が出ています。そういう学問を聞きまして、非常に刺激を受けているわけでありませう。

こうして、共同研究と、研究協力を二本の柱にして、センターは既に活動を開始しているんですけども、いよいよ建物もできまして、今年の七月には移転、そして、十二月にはオープンのパーティも開けるといふことになっていくわけです。建物が全部完成するまでには、まだ三年くらいかかりますけれども、洛西の桂坂の地区に、やっとなれわれの本拠が出来るといふことでございます。これは、やはり、今後の日本が間違った道を進まないためにも、これから正しい研究が生まれなければならない。ここが、外国人の日本研究の港のような役割をしなければならぬと思っております。

そういうような活動を、センターはしているわけですが、

センターは過去三年間、国際研究集会を「世界の中の日本、方法と解釈」という総合テーマで、行ってきたわけでございます。第一回は、「日本研究のパラダイム、日本学と日本研究」というのがテーマでございます。そして、第一回の基調講演には「世界の中の日本文化」と題しまして、レヴィ・ストロース先生、「世界の中の日本文学」という題で、ドナルド・キーン先生、「世界の中の日本の宗教」という題で、の三人が講演したわけでございます。当時、キーン先生もうちの教授でございまして、大変いい講義でございましたが、特にレヴィ・ストロース先生の講義はすばらしかった、本当にヨーロッパ文化の深さと、品格というものを私は、レヴィ・ストロース先生から学んだのでございます。実に堂々たる講演でございました。

昨年は、「対象と方法」というテーマでございまして、各専門からみた日本文化の問題点ということで、ポール・ケネディ先生が「世界の中の日本の役割」という題で講演され、高坂正堯先生が、「日本の立場、内なるものの視座」という題で講演をされたわけです。ポール・ケネディ先生は、大変大きな問題提起をされたまだ若い学者でございますが、大変謙虚なお話でございました。そして、日本の評価が高く、むしろ高坂先生よりも日本について高い評価をくださったわけでございます。

今年も、「日本研究の総合化について」というテーマでシンポジウムを開催することになっており、三人の先生にご講演を願うことになりました。おひとは、陳舜臣先生です。日本を見るときに、一つはヨーロッパとの比較においてみなければならない、もう一つは、アジ

アとの比較においてみなければならぬと先ほど申しました。陳先生は、中国の方でございますが、ずっと神戸で育たれ、自分の中に、日本という視野と中国という視野との二つを持っておられる、大変まれな方でございます。陳先生の教養は、大学教授も顔負けの教養でございます。本当は大学教授にもなるべき人だったんでございませうが、当時はまだ日本国籍を持たないと国立大学の教授にはなれないという規程がありまして、陳先生は小説家になったということでもあります。

これは、作家陳舜臣の誕生には、日本の偏狭さが役に立ったということになります。私は、天安門事件のときの陳先生のある新聞に寄せられた文章を見まして、大変感動をしました。あの天安門事件についてたぐさんの人が語ったけれども、陳先生ほど深い悲しみをもってあの事件を語られた人はないと、私はそういうふう思ったのでございます。

それから、カーメン・ブラッカー先生。この先生は、後から久野委員長によりまして、詳しい紹介があると思うんですけども、ケンブリッジ大学の教授で、日本の民俗学の研究をされています。そして、先生の本に『あずさ弓』とか、『古代と宇宙論』とか、そういうような本がございますが、特に『あずさ弓』は非常な名書という評判です。これは、私はケンブリッジの大学で、日本の民俗学が育ったということに、不思議な感動を覚えるのです。

と申しますのは、日本民俗学の開拓者、柳田や折口の学問は、生きているうちはアカデミックな学問として認められなかった、あれは、せいぜい民間の学問で、本当の学問ではないと、あるアカデミックな

先生は、あれは民俗学でなくて、野蠻学だと言ったということでございます。柳田さんが京都大学で非常勤講師になられたとき、日本のアカデミックで自分が受け入れられたことについて、大変喜ばれたと、それは今から見ればもうそのような話ですが、そういう柳田学・折口学が、イギリスへわたって、そのアカデミーでブラッカー先生のような新しい学問を生んだということに、私は感動を覚えるわけでございます。今日はきつとすばらしいお話が聞けるんじゃないかと思えます。

もう一人は、うちのセンターの教授、中西進先生でございます。中西先生は東大を出られまして、筑波大学に勤められていたのですが、うちにあえて来ていただいたわけです。私のところのセンターでは、一切の学閥、学派はない、また、一つの学閥をつくってある特定の大学の卒業生しかいないということはしない、本当に創造的な人だったら一切学問傾向も問わない。そういう方針で、私は人事の選考を進めております。

だから、日本中から創造的な学者を集めているわけですが、中西先生には、はるばる筑波大学からきていただいたわけでございます。私は、ずっと昔から考えておりますが、やっぱり学問は自分の足で立たなくてはならない、福沢諭吉のいう独立自尊にならなくてはならないと思うんです。私は、日本の学者は、まだ独立自尊の人間になっていない、学閥に、あるいはイデオロギーにとらわれたりする。そうではなくて、本当に自分の頭で考えたことを語らなくてはならないと思えます。

私は、日本の各層において、こういう独立自尊の人間が育っていない、その点で西洋の人たちのほうが上だと思っております。集団としては、日本は力を発揮しますが、一人、一人が、まだ独立自尊の人間になっていない、私は、この機関を独立自尊の人の集まりにしたい。一人一人がそういう個性的な、自分の足で立つ学者の集まりにしたいというふうに思っているわけでございます。

この公開講演会の講演者については、後から久野委員長からお一人ずつ詳しい紹介があると思いますが、私もひとこと述べさせていただきます。以上で私の冒頭のごあいさつにいたしましたと思います。どうもありがとうございました。